

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381229

研究課題名(和文)鑑賞と音楽づくりを通じた音楽理解の再構築

研究課題名(英文)Reconstruction of Understanding Music through Listening and Composing

研究代表者

坪能 由紀子(Tsubonou, Yukiko)

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：50027710

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本の音楽教育ではoutsideから音楽を学ぶ方法が長らく取られて音楽以外のイメージや情景等が強調され、音楽そのものへのアプローチがおろそかになってきた。本研究はそれに対してInsideからのアプローチの意味を問うものである。

日本音楽教育学会大会におけるシンポジウムではクラシック、日本伝統音楽、現代音楽の専門家を招聘して議論し、それぞれの分野におけるInsideとoutsideの関係を問い、結果的にはoutsideとはinsideへの回り道にすぎないとの結論に達した。また坪能は第3の道、Common-sideという考え方を、音楽理解や音楽づくりのための今後の教材化への指針として提唱した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the meaning of the approach to music from inside, namely music itself, because in Japanese music education, many studies have been conducted on the approaches from outside of music, namely from extra-music imagery. As a result, music classes tend to be filled not with music, but with words and extra-music imagery.

At the Japan Music Education Society conferences (2014-2016), the representatives of this research project as well as guests who specialized in the fields of European classical music, Japanese traditional music especially Kabuki, and contemporary music discussed these opposing approaches and concluded that even if we enter into the music from the outside, we recur to music itself sooner or later. Tsubonou also proposed a 3rd way named "Common-side," which consists of new clues that lead to the understanding and composing of music.

研究分野：音楽教育学

 キーワード：鑑賞 音楽づくり Inside of Music Outside of Music 効果音と音楽 日本伝統音楽 現代音楽 C
ommon-side

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマは「鑑賞と音楽づくりを通じた音楽理解の再構築」であるが、具体的には音楽理解のために Inside(音楽の内側から音楽そのものにアプローチする方法)と Outside(音楽以外のものを手がかりとして音楽にアプローチする方法)の2つを対比させて、研究にあたっての切り口とした。

日本の音楽教育では長い間「表題」をもとにした鑑賞や音楽づくりの活動、すなわち Outside からのアプローチが数多く行われてきた。このような音楽の接し方に慣れてしまうと、たとえば鑑賞の場合、表題を持たない音楽を聴いた場合にも「音楽以外のもの」(Extra musical image)を思い浮かべる聴き方が助長される。学校での鑑賞の授業といえば曲を聴いて感想文を書く、それも曲の流れに合わせてイメージや物語を綴っていく、といった活動となりがちであった。

「音楽づくり」(児童自らが音楽をつくる活動、学習指導要領には小学校では「音楽づくり」、中学校・高等学校では「創作」と記されている。以下「音楽づくり」と表記)でもこの傾向は強く、1989年の学習指導要領に導入された当初、音楽以外のイメージや物語をもとにした活動が圧倒的に多かったのは、雑誌「教育音楽」等の当時の指導事例等を見ても一目瞭然である。一時期、音楽づくりとは、物語や事物のイメージに合わせて音をつける活動、ととらえられていたふしさえある。

一方、「アウトリーチ」や「コミュニティ・ミュージック」として世界各国に広まり、日本でも多くの芸術団体が行っている「教育プログラム」は、オーケストラなどの演奏団体や演奏家たちが、主にクラシック音楽を分かり易いものにするために開発してきたものであるが、ここでも日本のプロの音楽家による教育プログラムは、Outside すなわち、音楽の外側にある物語や様子などから始まることが圧倒的に多い。音楽以外のものを手がかりにすることが、アマチュアや子どもたちにとって分かり易さにつながると信じられているのであろう。こうした傾向の中で、すでに学習指導要領にも「共通事項」として位置づけられている Inside、すなわち音楽そのものからのアプローチを、音楽教育に位置づける意味を解明すること、またその方法論を明らかにすることが、音楽教育にとって喫緊の課題であろう。

2. 研究の目的

本研究は日本および諸外国の音楽の聴き方や、音楽づくりの、学校教育・社会教育における歴史的側面をふまえて、国内外の学校(および社会)教育における「鑑賞」と「音楽づくり」の現状を調査し、これらの結果をふまえて、さまざまな様式の音楽を理解するために、音楽そのものを教える音楽教育の意味を音楽学、美学、心理学、音楽教育学などの多角的な視点から探りつつ、実践のための方法論を構成することを**目的とする**。

3. 研究の方法

小学校・中学校における授業の実践とその分析。

Creativity Conference(2014.06)における研究代表者、研究分担者、研究協力者の発表
Institute of Creativity in Music Educationの研究大会(2014;2015夏)における研究代表者、分担者、協力者の講演会。

日本音楽教育学会における、研究代表者、分担者、協力者による3回のシンポジウム。

研究代表者と分担者は2016年9月に渡英し、ロンドンの教育プログラムおよび学校教育における Inside と Outside のあり方について行った、6人の研究者へのインタビュー調査。

これらをもとに、International Journal of Creativity in Music Education vol.5の特集として「Inside or Outside?」が生まれ、ここに日本音楽教育学会シンポジウムの登壇者の多くが論文を寄せている。(日本音楽教育学会のシンポジウムについては、研究代表者と分担者が学会誌に短く内容を報告した)。

4. 研究成果

日本音楽教育学会大会では共同企画として「Inside or Outside?」と題する4回のシンポジウムを、研究代表者の坪能、分担者の今田、水戸、駒が企画し、発表にも参画した。本研究を立ち上げる前の第1回のシンポジウムで野本由紀夫(音楽学、西洋音楽史、2013年、弘前大会)は、音楽史上で「標題音楽」という概念を打ち立てたリストが「標題音楽は物語音楽や描写音楽などではない。標題は音楽の内容ではなく、音楽の経過、すなわち音楽構造を暗示するものであった」と述べ、「だから音楽が完成した後に標題がつけられる。授業で『～を表している』と教えるはならない」と述べた。つまり一般に Outside から聴く音楽の代表とされる標題音楽でさえ、実は Inside が重要であるとリスト自身が述べたことを明らかにしたのである。

これをうけて、今田匡彦は、中学校の生徒たちに「紙」を素材として音楽をつくるという課題を出し、「音の質」を追求するグループと「物語」をもとにするグループに分けて音楽づくりを行った。その結果、生徒たちは特定の「シニフィエ」に縛られた音楽情報、つまり Outside からのアプローチになんの発展性もないことに気づいた、と述べている。つまりこの中学校の授業実践で、Inside からのアプローチのより音楽的な発展性を見出すことができたのである。

第2回の2014年のシンポジウム「日本伝統音楽における情景描写」(聖心女子大学)では、より Outside との関係が深いと考えられ、日常的に Outside からのアプローチが多く見られる日本の伝統音楽における Inside と Outside の関係について発表が行われた。澤田篤子(音楽学、音楽教育学)は、「声の音楽が多く、視覚

表現を伴う場合が多い日本伝統音楽であるからこそ、逆に音楽によりさらに情景描写をするという屋上屋を架すようなことは、そもそも不要である」と述べ、「実践の手がかりとして、言葉、場（空間）、身体性、記譜、伝承方法、すなわち Outside をふまえた上で、音楽の仕組みすなわち Inside を学ぶという方法」を、久保田ら伝統音楽の研究者らが一冊の本として出版したと紹介している。

配川美加（日本音楽）は、歌舞伎の情景描写を伴う音楽や音は「写実的效果音、様式的効果音、様式化された三味線音楽の3種類に分類できる」とし、そのうち雨、雷、鳥の声などのような効果音は、音楽家ではなく、擬音道具を用いた小道具方などが出し、実はまったくの効果音は、様式された効果音あるいは三味線音楽とは、別の人が別ものとして表していることを、明確に示した。

2015年のシンポジウム「架橋としての Common-side」(宮崎大学)では坪能、今田、水戸が Inside でも Outside でもない Common-side の可能性を示した。これは造語であるが、子守歌、舟歌、Interlocking、日本の音楽でいえば「さらし」のようないくつかの音楽に共通する要素を手がかりとして音楽を聴く、あるいはつくるとする方法の提案である。

2016年のシンポジウム「音楽づくりの手がかりを求めて」(横浜国立大学)では、対象を現代音楽にしぼり、ピアニストでもあり現代日本を代表する作曲家である武満徹をレパートリーとし、また研究対象ともしている大竹紀子(相模女子大学)が、多くの詩的なタイトルと雰囲気を持ち、ともすれば情景描写的を手がかりとしてとらえられがちな武満の作品についても「武満の音楽は雰囲気だけではない。そこには分析に裏付けられた理由がある」とし、「Inside という音そのものに入り込むこと」あるいは「選ばれた音の意味を知る」こと、それによって、選ばれた音をとりまく社会を知り、それが Outside につながっていくのではないかと指摘した。

多くの現代音楽を小学校の授業で教材化してきた松下は、幅広い音楽的要素を用いる現代音楽だからこそ、音楽を形づくっている要素の全体像をつかむことができること、そしてそこで培われた能力が、音楽づくりや演奏に反映されることを、実践を交えながら明確に示した。

作曲家である近藤謙は、Inside と Outside というとらえ方に対して、2つの問題点を挙げた。第1に、音楽における Inside とは何かとは必ずしも、一義的でも明確でもなく、音楽とは多くの要素が複合的にかみあった構造物であることに着目した。第2は、Inside と Outside とは音楽という概念において、必ずしも明確に分けられるものではないという点である。近藤はこれらを、現代音楽の多くの作曲家を例に出しつつ、分析した。

研究代表者および分担者は、2016年9月に渡英し、さまざまな形でイギリスの音楽界や音楽教育に大きな影響力を持っている Gillian

Moore(サウス・バンク・センター芸術監督)、Peter Wiegold(作曲家)、Fraser Trainer(作曲家、ワークショップ・リーダー)らに、彼らが音楽活動の中で、Inside と Outside にどのようにアプローチしているのかを中心にインタビューを行った。そこでは、近藤と同じく、Inside と Outside の関係性について新たな観点から考察すべきである点も指摘された。

イギリスでの調査研究については、研究代表者の病気や、渡航の日程調整の不備から、実施が研究最終年の秋にずれ込んだ。そのため、このイギリスにおけるインタビューについては、まとめられないままになっている。今後の課題として考えていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1 澤田 篤子(2017) Japanese Traditional Music and Scene Description, International Journal of Creativity in Music Education vol.5, 査読ナシ

2 配川美加(2017) A Scene Depiction of Kabuki by Music and Sound, International Journal of Creativity in Music Education vol.5, 査読ナシ

3 大竹紀子(2017) Creative Music Approach from a Perspective of a Performer: Inside or Outside Concept Found in the Music of Toru Takemitsu, International Journal of Creativity in Music Education vol.5, 査読ナシ

4 松下行馬(2017) The Significance of Creative Music based on Contemporary Music, International Journal of Creativity in Music Education vol.5, 査読ナシ

5 近藤謙(2017) Some Thought of Musical Understanding in Education, International Journal of Creativity in Music Education vol.5, 査読ナシ

6 坪能由紀子(2017), Inside or Outside?: The Clues of Understanding and Creating Music, Springer (In press) 査読アリ

[学会発表](計3件)

1 大竹紀子(話題提供)、松下行馬(話題提供)、近藤謙(話題提供)、今田匡彦(司会・企画)、水戸博道(企画)、坪能由紀子(企画)、(2016) Inside or Outside?(4): 音楽をつくるための手がかりを求めて、日本音楽教育学会第47回大会パネルディスカッション

2 坪能由紀子(話題提供)、今田匡彦(話題提供)、水戸博道(話題提供、司会)(2015) Inside

or Outside?(3): 両者の架橋としての
Common-side, 日本音楽教育学会第46回大会
シンポジウム

3 澤田篤子(話題提供),配川美加(話題提供),
坪能由紀子(司会)(2014) Inside or
Outside?(2): 日本伝統音楽における情景描写,
日本音楽教育学会第45回大会シンポジウム

〔図書〕

1 坪能由紀子(編)(2017) Inside or Outside?
(Special Issue), International Journal of
Creativity in Music Education vol.5, Institute
of Creativity in Music Education, pp.158

6. 研究組織

(1)研究代表者

坪能 由紀子 (Tsubonou Yukiko)
日本女子大学・家政学部・教授
研究者番号: 50027710

(2)研究分担者

駒 久美子 (Koma Kumiko)
和洋女子大学・家政学部・准教授
研究者番号: 10612608

今田 匡彦 (Imada Tadahiko)
弘前大学・教育学部・教授
研究者番号: 30333701

水戸 博道 (Mito Hiromichi)
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号: 60219681

(3)研究協力者

野本 由紀夫 (Nomoto Yukio)
玉川大学・芸術学部・教授

澤田 篤子 (Sawada Atsuko)
洗足学園大学・音楽学部・教授

配川 美加 (Haikawa Mika)
日本女子大学・文学部・学術研究員

大竹 紀子 (Otake Noriko)
相模女子大学・学芸学部・教授

松下 行馬 (Matsusita Ikuma)
神戸市立水木小学校・教諭

近藤 譲 (Kondo Jo)
作曲家